

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている, C:あまりできていない, D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
心豊かでたくましい子	心が動く 遊びが動く ～もっとやりたい!また 明日も～	「もっとやりたい!また 明日も」と試行錯誤を繰り返し、これまでの経験をつなげながら遊びを展開している  自分の思いを伝えたり、相手の思いに気づいたり共感したりしながら、身近な人との関わりを深めている  異年齢の関わりの中で憧れや相手を思いやる気持ちが育ち、少し困難なことでも繰り返し挑戦する姿が増えている	「もっとやりたい」という思いが高まり、試行錯誤の中から、今まで経験したことが遊びにつながり、遊びの続きを楽しむ姿が増えた。また、友達との遊びに目を向ける子が増え、「自分も!」と心を動かし遊びに向かう姿も見られている  各学年で発達に応じた子どもの成長の姿が見られた。特に年長児は、遊びを通して話し合いの中で、一人一人が自信をもって相手に思いを伝えたり、相手の思いに気づいたり、共感する姿が増えた。また関わりの中で、相手を思いやる気持ちが育っている  全職員が異年齢の関わりでの大切さを理解し、子ども達の挑戦したい気持ちを肯定的に捉え、「やってみよう」とする気持ちを支えたことで、しぜんと年下児を思いやる気持ちが育ち、年上児に憧れの気持ちを向ける姿が増えた。また、そこから刺激を受け、困難なことに対しても自ら挑戦してみようとする姿が多く見られるようになっていく	B	A	・子ども達の遊びに職員の意図があり、遊びを系統立て、つながりを意識して取り組んでいるのがよく分かった  ・B評価がついているところは、職員が「もっと伸ばせることがあるのではないかと」前向きに捉えているのではないかと感じる	・子どもが主体的に遊びを進めていくためには、乳児期からの関わりが大切だということを再確認し合い、日々の応答的な関わりなど、職員全体で意識し連携を進めていく ・子どもの「もっとやりたい」にすぐに対応できるように、教材の準備、工夫をする。そのための、教材研究を園内研修で行っていく ・子ども同士のトラブルも成長過程の一つだと捉え、お互いの思いを伝え合える大切な機会として、保育の中に位置づけていく。また、職員同士で具体的な話し合いを行い、子どもの気持ちに寄り添える援助の方法などを職員全体で共有していく ・遊び出しの環境の工夫や、園庭に出る時間など保育者同士の連携が異年齢の関わりを生み出すことを意識して、今年度の関わりを基盤とし、次年度に引き継いでいけるようにする

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	子どもの発達や経験などを十分に把握し、発達のつながりやその子らしさを職員間で共有し、一人一人に合わせた適切な援助を行っている	公開保育時には教育課程を活用し、学年ごとの育ちをおさえ、育ちのつながりを意識するように心がけた。また、一人一人の発達の姿を肯定的に受け止め、個の良さや得意なこと、その子らしく育っていく姿を全職員で支えていけるように連携を密にした	A	A	・長時間保育の子ども、友達、先生がいて、安心して過ごせる場になっている	クラス、学年間での共有はできているが、フリー職員までを含め共有にはまだ十分ではないので、報告や意見を出し合える場を工夫していく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	在園時間が異なる園児が安定感を持って過ごし、自分の気持ちを安心して表現できるような環境を工夫をしている	早番、遅番時間でも一人一人が安心して過ごせるように、各学年の職員が一人一人の体制をとったり、職員の連携を深めたりすることで、自分の気持ちを安心して表現する姿が見られた。また、定期的に環境の見直しを行うことで、担当職員の意識も高まり、子どもの気持ちの安定につながった	A	A	・小学校でも、職員自身がワクワク感をもって教材の準備を行い、授業につなげている。大人がワクワクしなければ、子どももワクワクしないので、今後も教材研究などを通してワクワク感を大事にしてほしい	年度当初の混乱がなくなるように、今年度中に環境の見直しや伝達を行っていく。また、次年度は外国籍の子どもの増加を踏まえて、在園時間だけでなく、その園によっての習慣などを学び、多様性への配慮の仕方を全職員で学んでいく体制をとっていく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもの「もっとやりたい!また 明日も」が実現でき、思いがつながる環境が構成されている	振り返りの工夫や継続、園内研修の学びを活かすことで、子どもだけでなく、職員自身も「もっとやりたい!また 明日も」と思いがつながるようになってきた。幼児組、乳児組単位での連携、学年間の連携が深まり、環境構成について積極的な意見を話し合うことができ、今の子ども達の姿につながった	B	A	・今後も5S活動を続けてほしい。5Sの中の「しつけ」の部分では、保護者と連携しながら、子ども達の言葉使いについても教えていってほしい	教材研究や環境の再構成について、具体的な事例を出し合い、学べる機会を作っていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	ヒヤリハットの改善策を職員間で話し合い、事故防止や安全確保に努めている。また安全活動の基本「5S活動」を意識して取り組んでいる	ヒヤリハットの提出率が上がるように、担当者が改善を工夫したり、一人一人の意識を向上させたことで、前年度に比べ提出率は倍以上上がった。提出で終わらず、改善策の検討、危険箇所の確認、5S活動の推進を通して、事故防止につながった	B	B	・今後も5S活動を続けてほしい。5Sの中の「しつけ」の部分では、保護者と連携しながら、子ども達の言葉使いについても教えていってほしい	ヒヤリハットの提出の定着化、改善策や危険箇所については、他クラスの職員が考えてみるなど、新たな方法を取り入れていく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	栄養士など給食職員と連携し、栽培や食育活動を計画的に行い、食への興味・関心が深まるようにしている	前年度より多く栄養士がクラスに出向いたことで、子ども達との交流が深まり食への興味も広がった。年長児は登呂味噌の稲作を通して、食への関心が更に深まり、食べることだけでなく、しめ縄作りなど日本の文化に触れることができた。栽培や食育活動など年間計画をもとに実践していくことができた	B	A	・安全面での工夫が随所に見られたことは、とても良い ・遊び一つが一日、一回で終わっていない。4月からも続いているものもある。「明日ももっとやりたい」という声が増えていて、次につながっているのがよく分かる	職員自身が季節の野菜や栽培に対する知識を深めていくことで、教育・保育に積極的に取り入れ、子ども達とのやりとりの中で、食育に対する意識が高められるようにする
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	ケース会議の中で支援方法を検討し合い、担当者が孤立せず、悩みを解決したり、日々の支援に反映させている	定期的に公開保育やケース会議を行い、子ども理解を深め、個に合った支援方法を検討し合うことができた。トローバーの会を立ち上げ、実践していく中で、経験が浅い職員もねらいや願いをもって参加するようになり、会の運営もアイデアを出し合い、前向きに進めていくことができた	A	A	・パートの職員の気持ちの持ちようが素晴らしい、登呂こども園の大きな力になっている ・全職員で研修を進め、一人一人の子どもについての理解を深め、共通認識をもつことで、それが日ごろの保育の連携につながっている ・登呂公園等、地域に素晴らしい環境があり、恵まれている。稲を植え、収穫するだけでなく、正月飾り作りまで経験できたことは、子ども達の財産につながったのではないかと感じる	フリーの職員にも公開保育やケース討議に参加してもらうことで、担当者が休みの場合でも不安なく保育を進めていくことができるので、次年度は年度当初からの参加を進めていく
5 組織運営	(1)組織体制の充実	責任を持って各分掌に取り組み、職員間で連携を取りながら、円滑な園運営につなげている	前半は個々によって意識の差があり、分掌によっては活動の内容の見直しを行った。職種に関係なく、一人一人が声を掛け合ったり、協力し合ったりすることで、連携しながらすすめていくことができた	B	B	・全職員で研修を進め、一人一人の子どもについての理解を深め、共通認識をもつことで、それが日ごろの保育の連携につながっている ・登呂公園等、地域に素晴らしい環境があり、恵まれている。稲を植え、収穫するだけでなく、正月飾り作りまで経験できたことは、子ども達の財産につながったのではないかと感じる	各分掌で意識の差がないよう、どの職員も役割分担を年度初めに必ず行い、運営していく
6 研 修	(1)研修体制の充実	職員一人一人が園内研修での学びを日々の実践の中で活かし、重点目標や研修テーマの実現につなげている	研修主任を中心に日々の保育や公開保育、園内研修を通して、自身の保育を振り返り、その学びが保育へつながっている。全職員が参加できる体制をとることで、多様な視点で学びを深めることができ、日々の子どもの関わりや環境構成に活かされた	A	A	・登呂公園等、地域に素晴らしい環境があり、恵まれている。稲を植え、収穫するだけでなく、正月飾り作りまで経験できたことは、子ども達の財産につながったのではないかと感じる	今年度も途中で研修の方法を見直し、改善を行ったが、今後もPDCAサイクルを活用しながら、職員一人一人が前向きな気持ちで参加できる方法を検討していく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	子ども自身が地域や園内の自然に親しみ、「なぜ?」「不思議だな」「もっと」と思えるような環境を工夫している	季節の変化や四季が感じられるよう、園内の環境を充実させたことで、子ども達の興味が広がり、遊びの教材として自然物を取り込むことができた。また、今年度も登呂公園などの地域の資源を通して、ここでしかできない貴重な体験を積み重ねることができた	B	A	・登呂公園等、地域に素晴らしい環境があり、恵まれている。稲を植え、収穫するだけでなく、正月飾り作りまで経験できたことは、子ども達の財産につながったのではないかと感じる	どの職員も地域の良さや特色を活かせるように、より地域を知ること、また自然物に対する知識を深まることを目的に研修等を計画していく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	連絡ノートやお便りボード、各お便りを通して園の様子を伝えたり、保育参加会や面談を行ったりして、子どもの育ちを共有し、家庭との連携を深めている	保護者対象の参加会では、昨年度より長い時間参加時間を設けることができたため、以前よりも園の様子や伝わり、教育・保育についての理解を深めてもらうことができた。また、登降園時に丁寧に保護者とコミュニケーションを図り、子育ての悩みや子どもの成長を共有した	A	A	・この地域は環境だけでなく人材も豊かなので、今後も地域の力を借りて地域の資源を活かしてほしい	次年度からのICT化に向け、連絡ノートやお便りボード、各お便りの発信の仕方を検討し合い、園での様子や子どもの育ちが保護者に更に伝わりやすい方法を考えていく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣の小学校や園との交流を図り、情報交換や研修を進めている	近隣小学校との公開授業を通して、職員同士の交流だけでなく、生徒の訪問があり、年長児を中心に交流の場ももたせて、小学校への意識が高まった。また、近隣園との交流では、互いの園の公開保育を参観し合い、環境や保育、研修の進め方などを学び、その学びを全職員で共有できるようにした	B	B	・一步一步全体を通して飛躍してほしい。外から地域の人は、園のことをよく見ている。協力できることは協力したいと思っているので、今後も連携を大事にしていきたい	南部小、富士見小へのアプローチは今後も継続して行い、情報交換を図っていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域に親しみを感じ、豊かな生活体験が得られるよう地域との交流を行っている	登呂の家や公民館で地域のお年寄りやと直に触れ合うことができ、園の活動を知ってもらったり、子ども達の元気な姿を見てもらったりすることで、関わりが深まった。また、登呂公園などの豊かな自然環境を活かすことで、地域の良さを再発見し、教育・保育の中に取り入れることができた	A	A	・登呂の家や公民館で地域のお年寄りやと直に触れ合うことができ、園の活動を知ってもらったり、子ども達の元気な姿を見てもらったりすることで、関わりが深まった。また、登呂公園などの豊かな自然環境を活かすことで、地域の良さを再発見し、教育・保育の中に取り入れることができた	今後も地域の強みを活かし、様々な交流機会を教育・保育の中に位置づけ大事にしていきたい